

第 2 次南丹市総合振興計画

基本構想

たたき案

2017.6.8 現在

南 丹 市

◎基本構想構成案

参考：第1次南丹市総合振興計画	第2次南丹市総合振興計画（基本構想）
第1部 基本構想	序章 計画策定にあたって
<p>1 「南丹市総合振興計画」とは 計画の目的／構成と期間</p> <p>2 まちのすがた、これまでの歩み 合併による南丹市の誕生 現在の南丹市の姿</p> <p>3 まちづくりへの市民の思い アンケート結果</p> <p>4 まちを取り巻く動向 地方自治の変遷／社会情勢の動向</p> <p>5 活かしたい特性と取り組みたい課題</p> <p>6 私たちがめざすのは、こんなまち まちづくりのテーマとめざす将来の南丹市のイメージ まちづくりの基本目標</p> <p>7 人口フレーム 定住人口／交流人口</p> <p>8 将来のまちのすがた ゾーン形成／拠点形成／交流軸形成</p> <p>9 基本構想の実現に向けて</p>	<p>1 計画策定の趣旨</p> <p>2 計画の特徴</p> <p>3 計画の構成と期間</p> <p>4 関連する個別計画等</p> <p>5 計画策定の体制</p>
	第1章 現在の南丹市のすがた
	<p>1 南丹市の地域特性 位置・沿革／人口・世帯の状況 産業の状況／財政の状況 まちの魅力 まちづくりへの市民の思い</p> <p>2 南丹市を取り巻く社会潮流</p> <p>3 南丹市の基本課題</p>
	第2章 未来の南丹市のすがた
	<p>1 まちづくりの基本理念</p> <p>2 めざすべきまちの将来像</p> <p>3 人口フレーム</p> <p>4 土地利用基本構想</p> <p>5 まちづくりの進め方</p> <p>6 まちづくりの大綱</p>
第2部 基本計画	第3章 未来を実現するための取り組み
<p>第1章 生涯充実して暮らせる都市を創る</p> <p>第2章 自然・文化・人を活かした郷を創る</p> <p>第3章 人・物・情報を高度につなげる</p> <p>第4章 共に担うまちづくりの仕組みを築く</p>	
	第4章 施策連携プロジェクト
資料	資料
<ul style="list-style-type: none"> ・ アンケート結果 ・ 審議会委員名簿 ・ 諮問書／答申書 	<ul style="list-style-type: none"> ・ アンケート結果 ・ 審議会委員名簿 ・ 諮問書／答申書
<ul style="list-style-type: none"> ・ 審議会条例 ・ 策定体制／経緯 ・ 用語解説 等 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 審議会条例 ・ 策定体制／経緯 ・ 用語解説 等

序章 計画策定にあたって

1. 計画策定の趣旨

南丹市は、2006（平成 18）年 1 月 1 日に園部町、八木町、日吉町、美山町の 4 町が合併し誕生しました。2008（平成 20）年に策定した「南丹市総合振興計画」（以下、「第 1 次計画」）では、『森・里・街がきらめく ふるさと 南丹市』を将来像として設定し、将来像の実現をめざして総合的かつ計画的にまちづくりを進めてきました。

地方分権の流れの中、2011（平成 23）年の地方自治法の改正により、総合振興計画（基本構想）については法律上の策定義務がなくなり、策定については各自治体の判断に委ねられています。しかし、南丹市を取り巻く社会情勢の急激な変化等により、これまで以上に、自立した自治体経営と地域特性を生かした総合的なまちづくりが求められています。

また、2015（平成 27）年度に策定した「南丹市人口ビジョン」では、2060（平成 72）年には人口が 18,000 人程度にまで減少することが予測されています。少子高齢化による人口構造の変化や人口減少は、南丹市における経済活動やコミュニティ活動等の活力を衰退させ、ひいては南丹市における安定した生活・暮らしそのものの存立を脅かす事態になることが危惧されます。

このような状況認識のもと、南丹市では「定住促進」を市の最重要課題のひとつとして定め、2014（平成 26）年度に「南丹市定住促進アクションプラン」（計画期間：2014～2017 年度）を策定しました。さらに 2015（平成 27）年度には「南丹市地域創生戦略」（計画期間：2015～2019 年度）を策定し、定住促進の取り組みを総合的かつ効果的に進めています。

本計画においても、「定住促進」を最重要課題のひとつとして掲げるとともに、南丹市の魅力や特徴を十分に発揮しつつ、社会情勢の変化等によるさまざまな課題に対応し、将来にわたって持続可能なまちづくりを進めるため、2018（平成 30）年度以降の『まちづくりの方針』となる「第 2 次南丹市総合振興計画」を策定します。

2. 計画の特徴

(1) 市民の声を生かした市民にわかりやすい計画

計画の策定過程にあたっては、市民意識調査や市民ワークショップ(なんたんキャラバン)、市民意見募集手続(パブリックコメント)などの機会を通じて、広く市民の意見を集約しています。また、南丹市のまちづくりを進めるための考え方や基本方針を、市民の視点に立ち、簡潔でわかりやすく示した計画としています。

(2) 社会経済情勢の変化に的確に対応する計画

人口減少や少子高齢化、地方創生の取り組みなど、社会潮流が南丹市にもたらす影響を的確に把握し、これらに柔軟かつ適切に対応する計画としています。

(3) 個別計画と連携を強化し、実効性を高めた計画

第1次計画に基づき、分野ごとの施策を定めた個別計画との連携を強化するとともに、施策ごとに成果指標を掲げることで進捗管理を明確にし、実効性を高めた計画としています。

3. 計画の構成と期間

第2次南丹市総合振興計画は「基本構想」「実施計画」の2層により構成します。それぞれの期間と役割は、次のようになっています。

(1) 基本構想

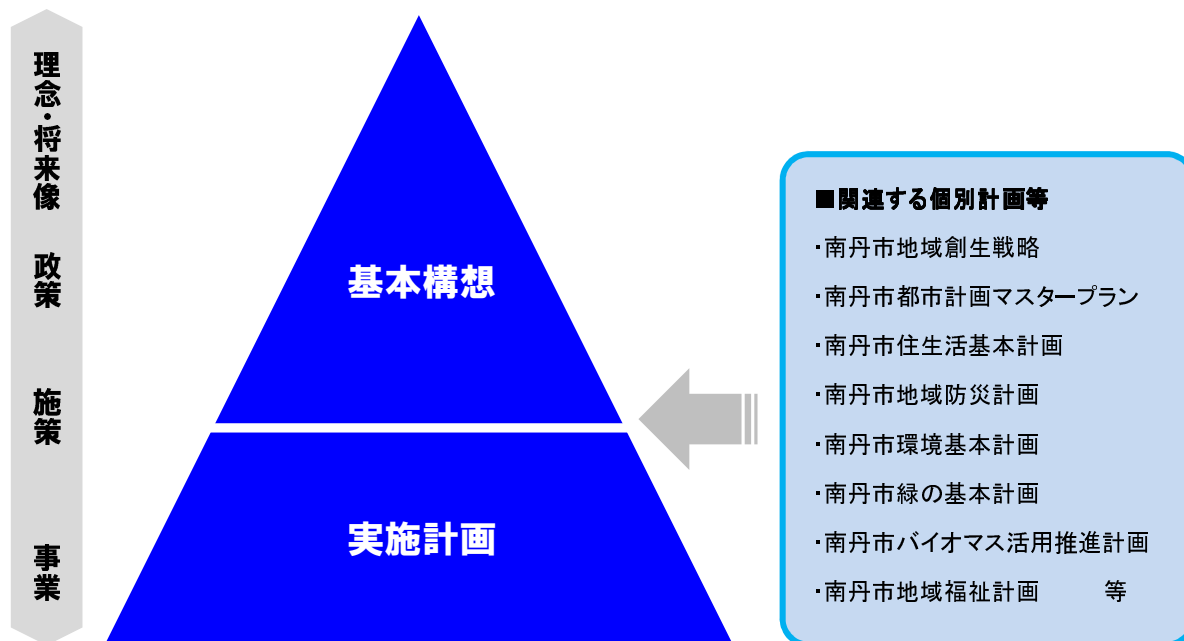
南丹市がめざすまちづくりの基本理念やめざすべき将来の方向性を明確に示し、市民、事業者の皆さんと共有するとともに、それらを具現化するための成果指標を掲げ、その達成のための政策や施策の方針を体系的に定めます。

計画期間は、2018(平成30)年度から2027(平成39)年度の10年間ですが、社会経済情勢や市民ニーズの急激な変化にも対応できるよう、5年をめぐりに見直しできるものとします。

(2) 実施計画

基本構想に定めた施策の方針を財政的な裏づけをもって実施していくために、具体的な事業として示すものです。3か年の計画をローリング方式により毎年度策定し、実効性の高いものとします。

■計画の構成（イメージ図）



第1次計画では、基本構想、基本計画、実施計画の3層で構成されていましたが、第2次計画では基本構想と実施計画の2層構成とします。

■計画の期間

年 度	2018 (H30)	2019 (H31)	2020 (H32)	2021 (H33)	2022 (H34)	2023 (H35)	2024 (H36)	2025 (H37)	2026 (H38)	2027 (H39)
基本構想	計画期間10年間									
	社会情勢や市民ニーズ等の急激な変化に対応するため、5年をめぐりに計画の見直しが可能									
実施計画	3年間の計画を毎年度見直し									

4. 関連する個別計画等

(1) 南丹市地域創生戦略との整合

定住促進の取り組みを総合的かつ効果的に進めていくため、2015（平成27）年に「南丹市地域創生戦略」（計画期間：2015～2019年度）が策定されましたが、第2次南丹市総合振興計画においても「定住促進」が最重要課題のひとつであるため、戦略の計画期間である2019（平成31）年度までは、南丹市地域創生戦略の各施策を本計画の重点施策と位置づけます。

(2) その他の個別計画等との整合

都市計画マスタープランや地域福祉計画など、関連する個別計画等との整合を図ります

■関連する個別計画等一覧

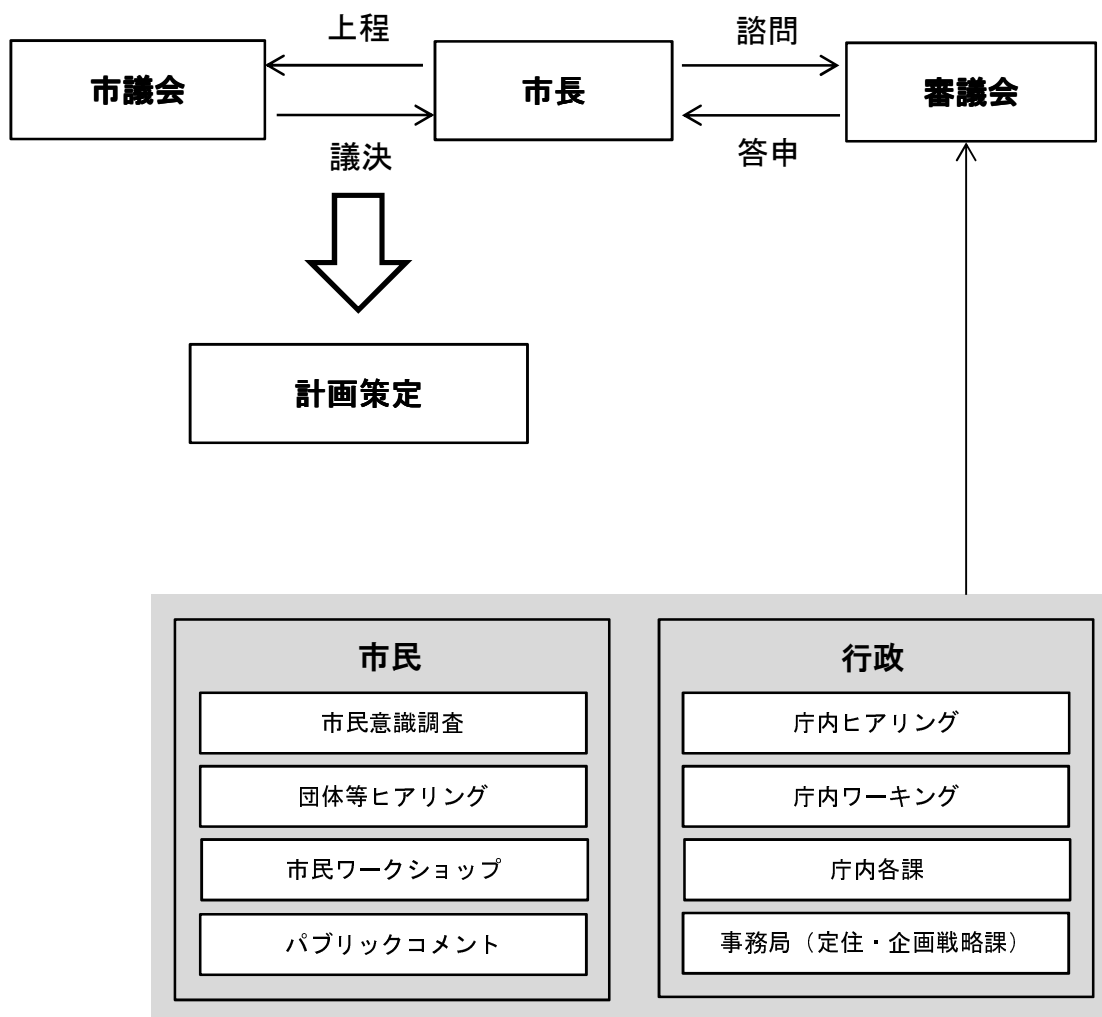
分野	計画名	計画期間
まちづくり 定住促進	南丹市新市建設計画	2005（H17）～2020（H32）年度
	南丹市人口ビジョン	2015（H27）年度～
	南丹市地域創生戦略	2015（H27）～2019（H31）年度
	南丹市定住促進アクションプラン	2014（H26）～2017（H29）年度
	南丹市過疎地域自立促進市町村計画	2016（H28）～2020（H32）年度
土地利用 基盤整備	南丹市都市計画マスタープラン	2008（H20）～2027（H39）年度
	南丹市住生活基本計画	2011（H23）～2020（H32）年度
	南丹市公営住宅等長寿命化計画	2012（H24）～2021（H33）年度
	南丹市立地適正化計画	2017（H29）年度～
	南丹市水道ビジョン	2010（H22）～2019（H31）年度
	南丹市生活排水基本計画	（2017（H29）年3月改定）
環境 景観	南丹市環境基本計画	2011（H23）～2020（H32）年度
	南丹市バイオマス活用推進計画	2015（H27）～2024（H36）年度
	南丹市バイオマス産業都市構想	2015（H27）～2024（H36）年度
	南丹市緑の基本計画	2008（H20）～2027（H39）年度
	南丹市美山エコツーリズム推進全体構想	2014（H26）年度～
	南丹市景観計画	2014（H26）年度～
健康 福祉	第2次南丹市健康増進・食育推進計画	2017（H29）～2026（H38）年度
	第2期南丹市地域福祉計画	2013（H25）～2017（H29）年度
	南丹市子ども・子育て支援事業計画	2015（H27）～2019（H31）年度
	南丹市高齢者福祉計画・第6期介護保険事業計画	2015（H27）～2017（H29）年度
	南丹市障害者計画	2012（H24）～2017（H29）年度
	第4期南丹市障害福祉計画	2015（H27）～2017（H29）年度

分野	計画名	計画期間
教育 スポーツ	南丹市教育大綱—南丹市教育振興基本計画—	2016 (H28) ~2020 (H32) 年度
	南丹市いじめ防止基本方針	2014 (H26) 年度～
	南丹市スポーツ振興計画	策定予定
人権	南丹市人権教育・啓発推進計画	2008 (H20) ~2017 (H29) 年度
	南丹市男女共同参画行動計画	2009 (H21) ~2018 (H30) 年度
行財政	南丹市中期財政計画	2014 (H26) ~2017 (H29) 年度
	第3次南丹市行政改革大綱	2017 (H29) ~2021 (H33) 年度
	南丹市公共施設等総合管理計画	2017 (H29) ~2026 (H38) 年度

5. 計画策定の体制

第2次南丹市総合振興計画を策定するにあたっては、市民と行政がともに南丹市の未来を考える計画づくりを策定方針としました。そのため、市民意識調査や団体ヒアリング、市民ワークショップ、パブリックコメント（市民意見募集手続）などを通じて、市民が計画策定に関わる機会を数多く設けました。市民一人ひとりのニーズや意見を積み上げた上で、庁内において各課ヒアリングや庁内ワーキング等を実施し、計画の原案を作成しました。南丹市総合振興計画審議会への諮問・答申を経た後、市議会の議決を得て、「第2次南丹市総合振興計画」の策定となりました。

以下に、第2次南丹市総合振興計画の策定体制を示します。



第 1 章 現在の南丹市のすがた

1. 南丹市の地域特性

(1) 位置・沿革

① 位置と地勢

南丹市は、京都府のほぼ真ん中に位置しており、北は福井県や滋賀県、南は兵庫県や大阪府、西は綾部市や京丹波町、東は京都市や亀岡市に接しています。面積は 616.40 平方キロメートルで、京都府の 13.4 パーセントを占める大きなまちです。

地勢については、緑豊かな自然に恵まれた地域となっています。大半を丹波山地が占め、北部を由良川が、中・南部を淀川水系の桂川（大堰川）が流れ、その間にいくつかの山間盆地が形成されて、南部は亀岡盆地につながっています。年の平均気温は 13 度前後で、山陰内陸性気候となっています。

道路については、市の北部に国道 162 号、南部に国道 9 号や国道 477 号、国道 372 号、京都縦貫自動車道が走っています。また、市内を走る各府道が国道へのアクセス道路となっています。

鉄道については、南東の京都市から北西にかけて J R 山陰本線が走っており、京都市などの通勤圏にあり、京都・園部間は複線化されています。

■位置図

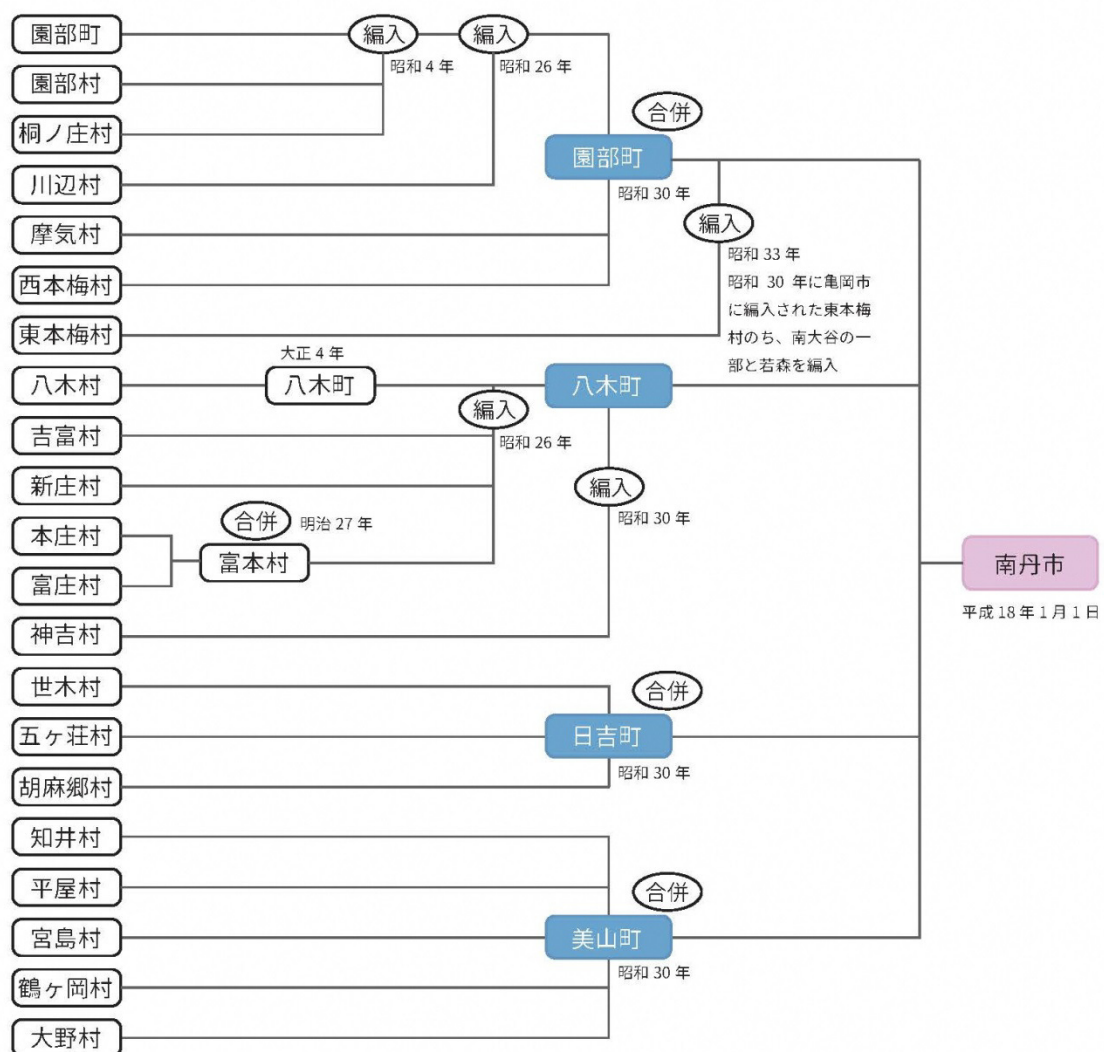
※広域図及び市域図挿入予定

② 沿革

南丹地域は、京都府と兵庫県にまたがる「丹波」の南部のことで、現在の南丹市、亀岡市、京丹波町を含む地域です。古くは丹波国の国府や国分寺がおかれ、丹波国の政治・文化の中心地として丹波国を支え、各時代の権力者からも重視されるなど、わが国の歴史において重要な役割を果たしてきました。

南丹地域の多くは森林で、丹波高原と丹波山地の中に、いくつもの盆地や谷がつくられています。これらの中に城下町や村落がつくられ、山に囲まれたそれぞれの地域が独自の生活・文化・経済圏を形成してきました。また、丹波高原を平地分水界として、太平洋に注ぐ桂川と日本海に注ぐ由良川の二つの異なる水系があり、それぞれに異なる生活文化圏として歩んできました。また、山陰街道、山陰古道、篠山街道など各方面を結ぶ街道が行き交う地域でもあり、交通の要衝として発展し、街道には多くの人や物資が行き交いました。このように南丹地域は、さまざまな人的・物的資源によって、都や日本の歴史を支え、時に歴史を動かしてきた地域です。

そして、平成18年1月1日、京都府船井郡の園部町、八木町、日吉町、および北桑田郡美山町の合併により「南丹市」が誕生しました。



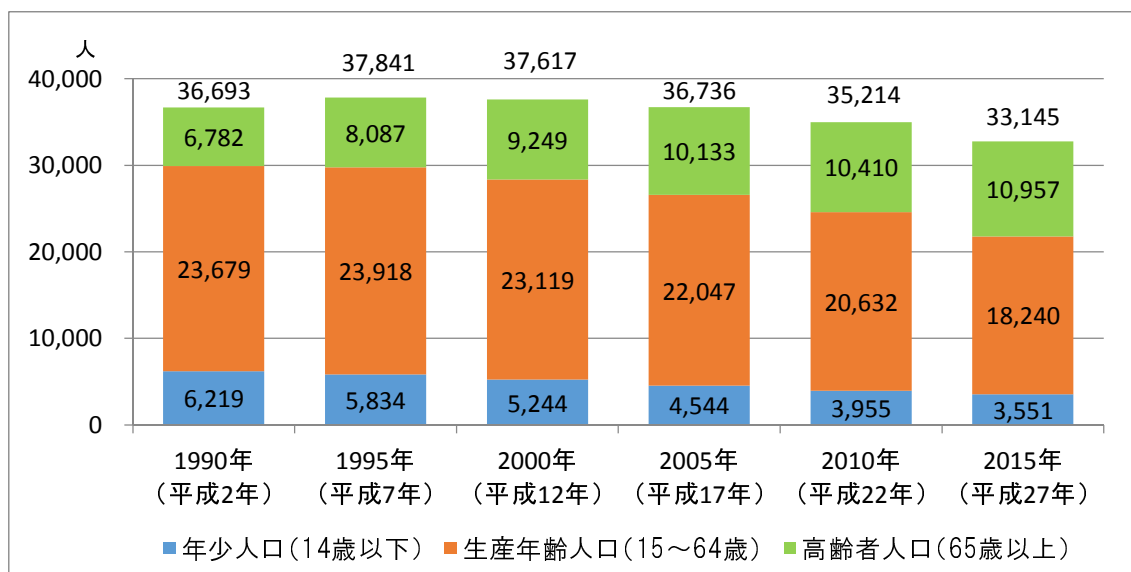
(2) 人口・世帯の状況

① 人口

近年の南丹市の総人口は、1990（平成2）年から1995（平成7）年にかけてやや増加しましたが、それ以降は減少が続き、2015（平成27）年現在で33,145人となっています。

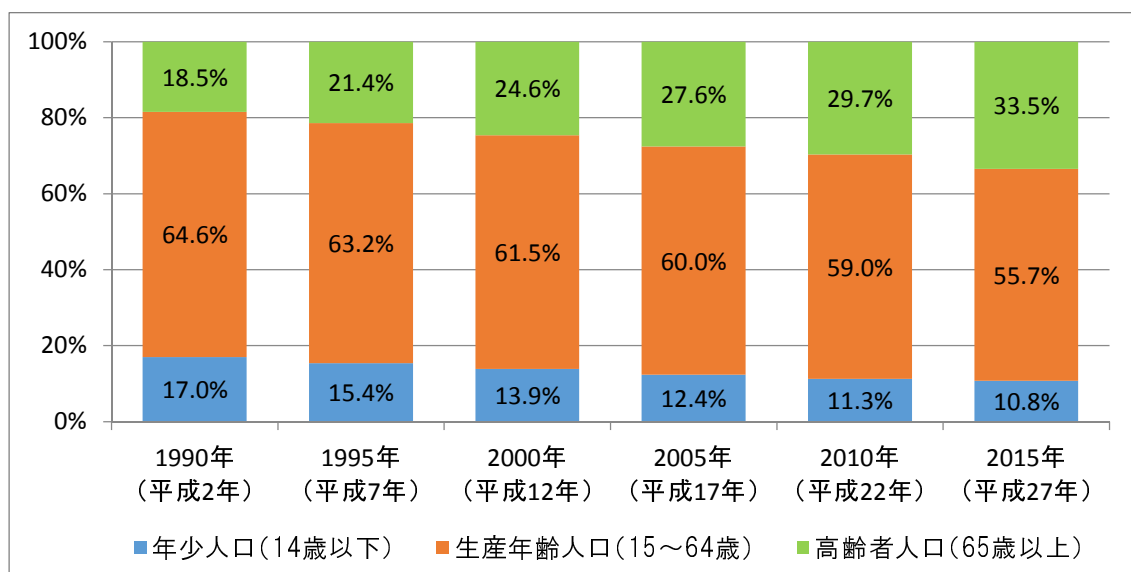
また、年齢構成の推移を見ると、1990（平成2）年は年少人口（0～14歳）が17.0%、高齢者人口（65歳以上）が18.5%だったものが、2015（平成27）年には年少人口が10.8%、高齢者人口が33.5%と少子高齢化が進行しています。

■総人口の推移



資料：国勢調査

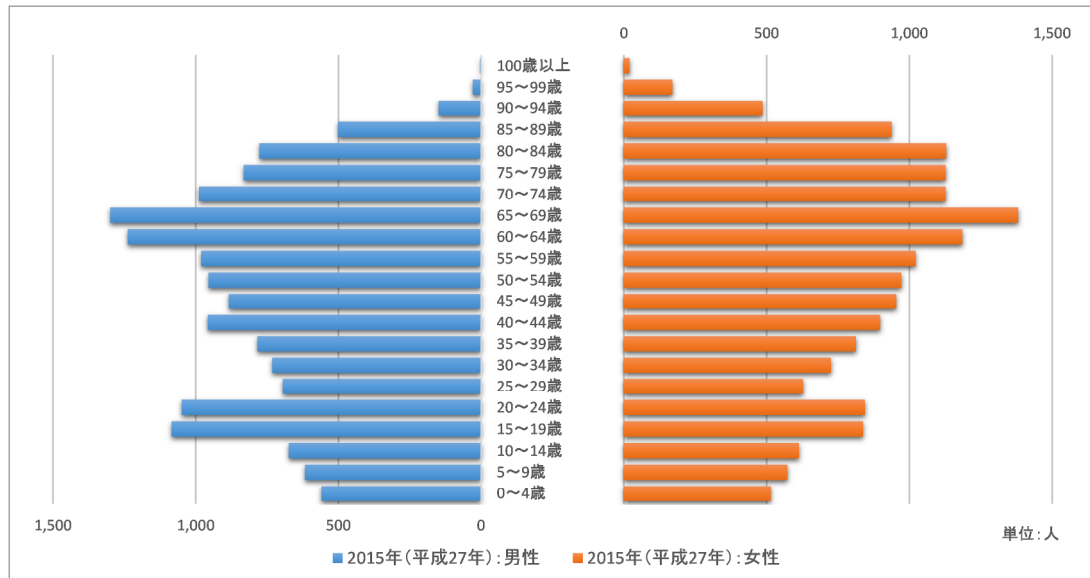
■年齢3区分比率の推移



資料：国勢調査

年齢別人口構成をみると、60～69歳の年齢層に加え、10代後半から20代前半の年齢層で多くなっています。南丹市内に大学や専門学校、高校等の教育機関が多く立地していることが要因として考えられます。

■年齢別人口構成

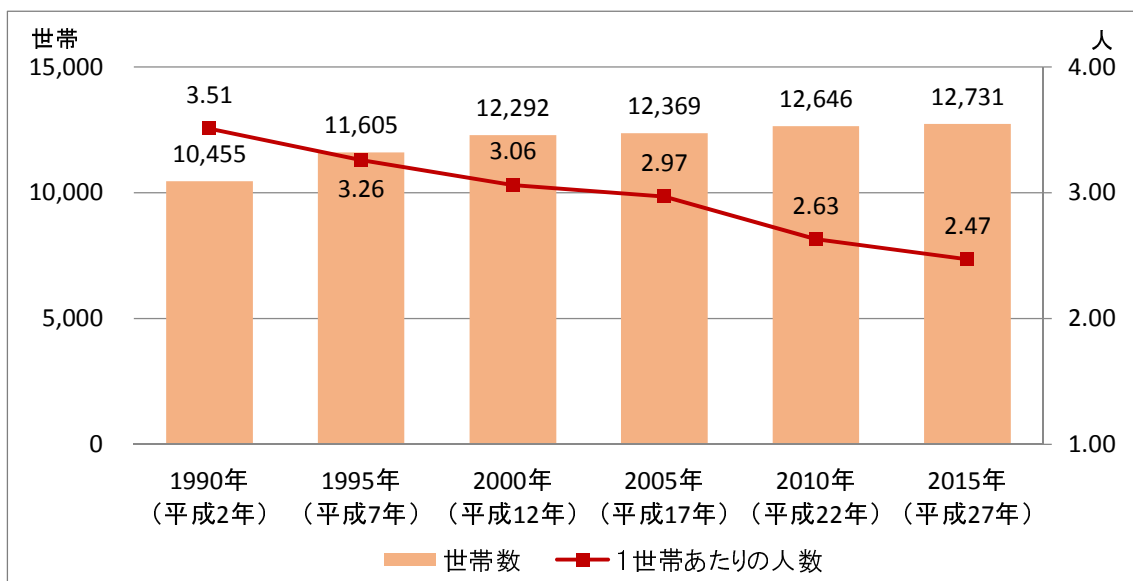


資料：2015（平成27）年国勢調査

② 世帯

世帯数の推移を見ると、増加の一途をたどっており、平成27年では12,731世帯となっています。一方、1世帯あたりの人数は、平成2年の3.51人から平成27年では2.47人となっており、世帯構成人数が減少していることがうかがえます。

■世帯数の推移



資料：国勢調査（世帯数は総世帯から施設及び不詳を除いた一般世帯数を表す）

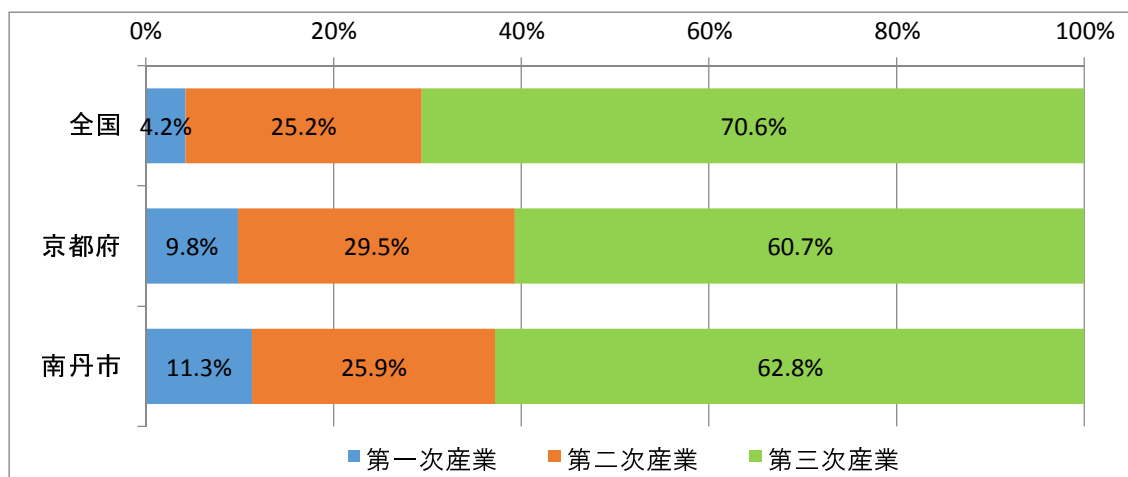
(3) 産業の状況

① 産業構造の状況

産業別就業者比率を京都府及び全国と比較すると、第一次産業の割合が京都府及び全国を上回っています。

また、産業別就業者数では、製造業、建設業や医療・福祉の分野で従業者数が多くなっています。特化係数においては、林業が9.6と非常に高くなっています。

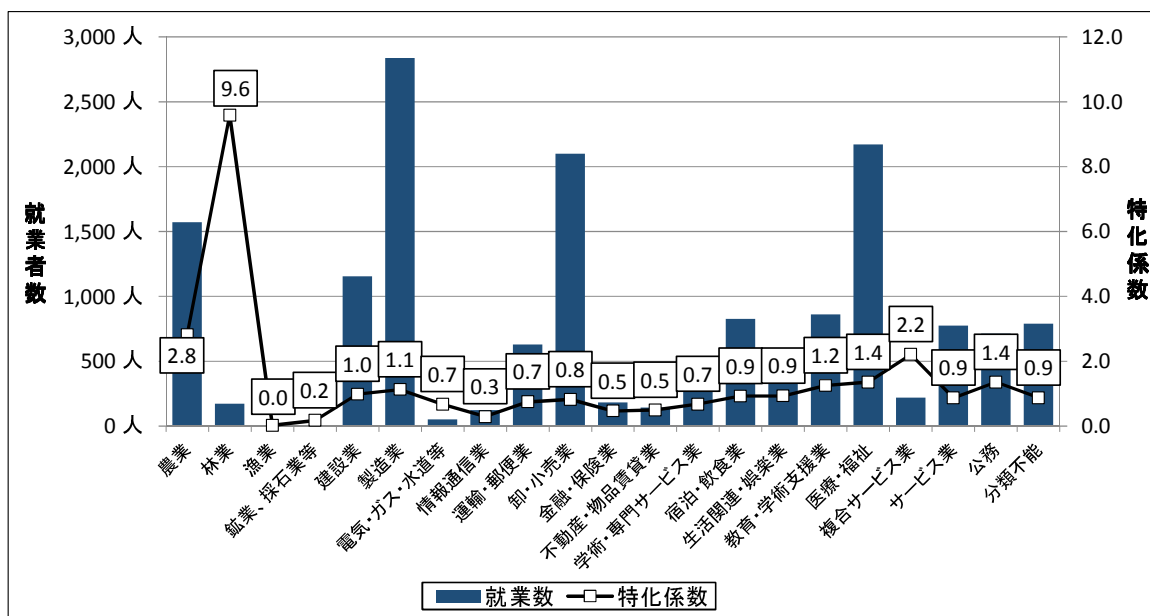
■産業別就業者比率の状況



資料：2010（平成22）年国勢調査

※「分類不能の産業」を除いた総数における構成比

■産業分類別就業者数と特化係数

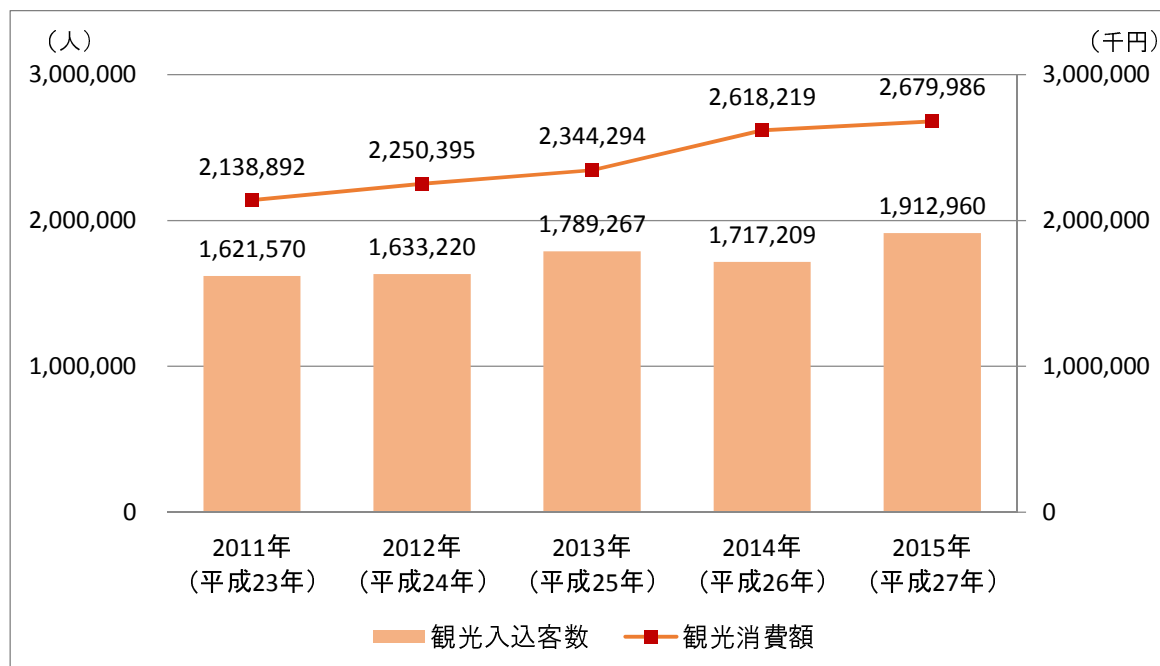


資料：2010（平成22）年国勢調査

② 観光の状況

観光入込客数をみると、2011（平成23）年以降ほぼ横ばいで推移していましたが、2014（平成26）年から2015（平成27）年にかけて約20万人増加しています。また、観光消費額については、2011（平成23）年以降、増加傾向で推移しています。

■観光入込客数及び観光消費額の推移



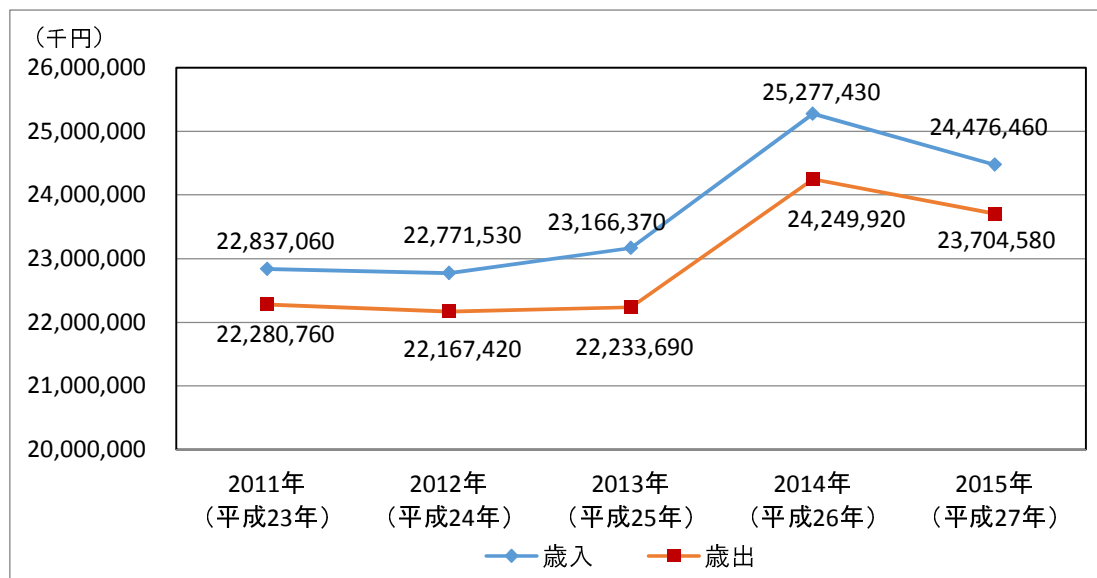
資料：京都府観光入込客調査報告書

(4) 財政の状況

歳入・歳出決算額については、歳入が歳出を上回り、黒字決算の状況が続いています。

また、財政健全化判断比率の指標である実質公債費比率と将来負担比率の推移をみると、ともに減少傾向にあることがうかがえます。

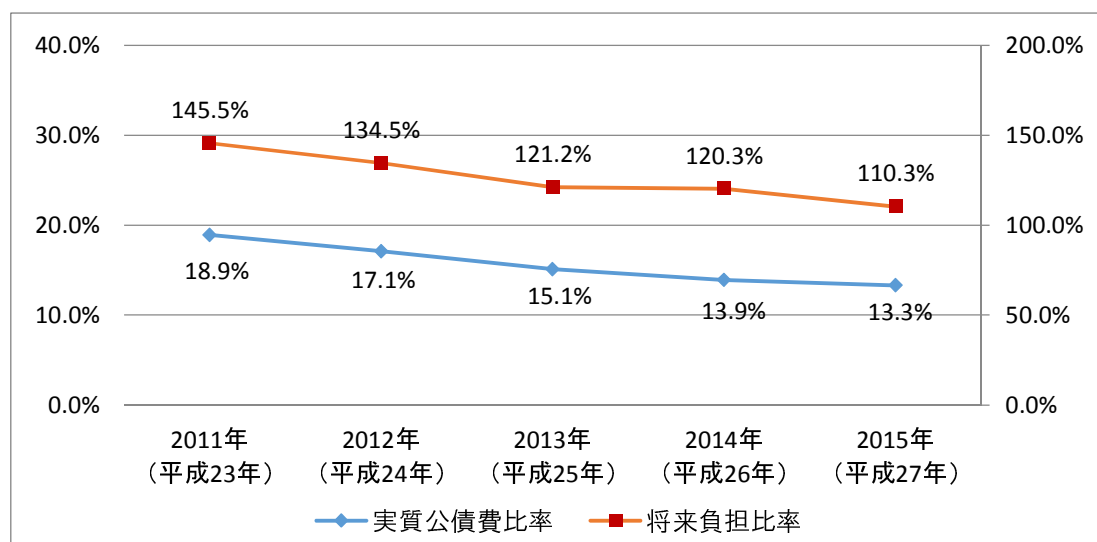
■歳入・歳出決算額の推移



資料：南丹市決算書

(注) 端数処理の関係で実際の額と一致しない場合があります

■財政健全化判断比率の推移



資料：南丹市決算書、健全化判断比率等の状況

(5) まちの魅力

① 個性あふれ魅力的な各4町

南丹市は、合併前から各4町がそれぞれ個性的で魅力あふれるまちづくりを進めてきました。特に、多くの観光客を惹きつける観光資源は豊富で、スプリングスひよしや府民の森ひよしなどの日吉ダム周辺施設、日本の原風景の残るかやぶき民家群、るり溪高原、清源寺の十六羅漢像などについては、南丹市の交流人口を増加させるための重要な役割を果たしています。

■各4町の特徴

町名	人口	観光資源	特徴
園部	16,766人	るり溪、生身天満宮など	市役所本庁がある市の中心地域。大学や専修学校など教育機関も多数あり、若い世代の人口も多い。自然公園や歴史資源が多数ある。
八木	7,615人	清源寺、京都帝釈天など	寺社仏閣が多く残る地域。JR山陰本線や京都縦貫自動車道が通っており、交通の便が良い。
日吉	4,940人	日吉ダム、スプリングスひよしなど	「京都のへそ」と呼ばれる地域。ゴルフ場や総合運動施設、温泉などの余暇施設が充実している。
美山	3,824人	かやぶきの里、大野ダム公園など	豊かな自然があり、伝統的なかやぶき民家が残る地域。古き良き原風景を生かした観光産業に注力している。

※人口は2015（平成27）年国勢調査結果

スプリングスひよし
写真

かやぶき民家群
写真

② 豊かな自然資源

「音風景百選」に選ばれたるり溪、芦生原生林、水源かん養機能などの重要な役割を果たす山林、また、国の「水の郷百選」にも選ばれている美山川清流や北西から南東に流れる大堰川などの河川、天然記念物オオサンショウウオ、ホタル、メダカなどの生物は、住む人に潤いを与えてくれます。

太陽光発電システムの活用や美しいまちづくり条例などの取り組みにより、こうした貴重な自然資源を大切に思い、守り育てる環境をつくってきたといえます。

るり溪
写真

芦生原生林
写真

③ 付加価値の高い農業

みず菜、壬生菜、九条ねぎ、黒大豆、紫ずきんなどのブランド京野菜の産地であり、その他、美山牛乳や京都肉などもあり、これらの付加価値の高い農産物に対するニーズは、今後ますます増大することが想定されます。

こだわりの採れたて野菜は、南丹市内にある道の駅（「京都新光悦村」「美山ふれあい広場」「スプリングスひよし」）などで販売されています。

京野菜
写真

道の駅（ふらっと美山）
写真

④ ものづくりのまち

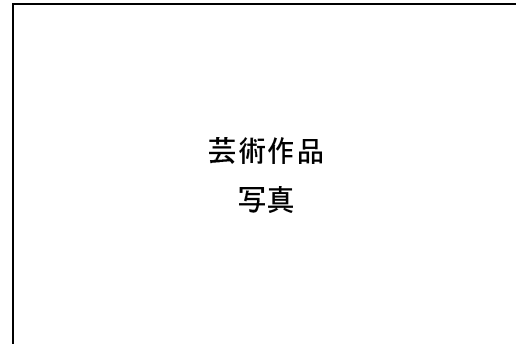
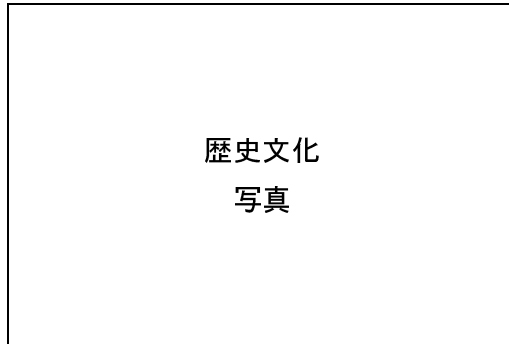
陶芸、木工、染織など、地域特性を生かした工芸品づくりが盛んで、多くの工芸家、職人が地域内外、国内外を舞台に活動しています。また、京都新光悦村では、伝統と先端との融合をコンセプトに、ものづくり企業が操業しています。

工芸品
写真

京都新光悦村
写真

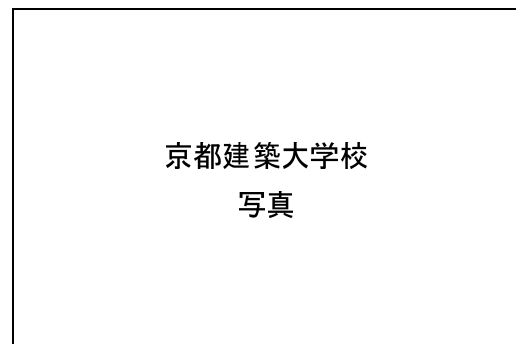
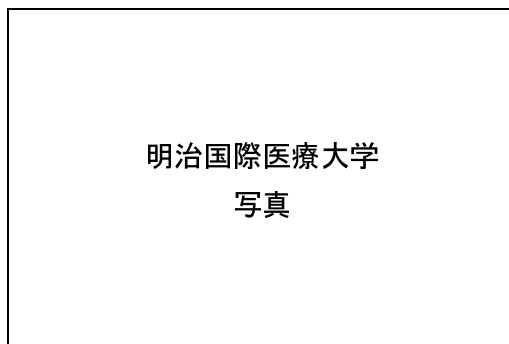
⑤ 歴史文化・芸術のまち

日本最古の天満宮である生身天満宮をはじめ、多くの指定文化財を有し、各地域には多くの伝統行事や伝統文化が息づくなど、長い歴史で培われた多様な文化があります。また、国内外を問わず、多くの芸術家が暮らし、創作活動を行っています。



⑥ 学生のまち

明治国際医療大学、京都医療科学大学、京都美術工芸大学、京都伝統工芸大学校、京都建築大学校、公立南丹看護専門学校、佛教大学園部キャンパスなどが立地しており、学生が行き交うまちとしての特徴もあります。



⑦ 福祉のまち

南丹市は、府下でも高齢者や障がい者向けの福祉施設が充実しており、福祉のまちづくりを進める上で、土壌が整っている状況といえます。また、住み慣れた地域で安心していきいきと暮らせるよう、地域と事業者、行政が連携して多様な福祉サービスが実施されています。

子育て支援については、子育て世代の多様なニーズに合わせ、様々な保育サービスが実施されており、待機児童の解消にも努めています。子育て発達支援センターでは、子どもの発達支援や相談、療育事業を行い、子どもの健やかな成長に向けた支援を行っています。

さらに、社会福祉協議会や福祉活動団体なども、地域福祉の担い手として市内で活発に活動しています。

子育て関係
写真

福祉施設
写真

⑧ 多彩な行事・イベント

南丹市内では、大小あわせてさまざまな行事・イベントが開催されています。これらの多くは、市内の豊かな自然や歴史・文化などの資源を活用した、南丹市ならではのものです。

■市内の主な行事・イベント（平成29年度現在）

月	行事・イベント名
1月	綱引き神事<17日、大送神社（八木町）> 厄神祭<19日、八幡神社（園部町）>
2月	美山かやぶきの里雪灯廊<上旬、美山かやぶきの里（美山町）> 雪まつり<中旬、美山町自然文化村（美山町）>
3月	アマゴ釣り解禁<下旬>
4月	大野ダムさくら祭り<上旬、大野ダム公園（美山町）> 大堰川さくら祭り<上旬、大堰川緑地公園（八木町）> 春日神社 春祭り<16日、春日神社（八木町）>
5月	生身天満宮春祭り<1日、生身天満宮（園部町）> 田原の御田<3日、多治神社（日吉町）>
6月	お田植えまつり<第1日曜、摩気神社（園部町）> 鮎釣り解禁
7月	田歌の神楽<14日、八坂神社（美山町）> 虫送り神事<中旬、鏡神社（園部町）>
8月	なんたん商工祭<園部町内> 南丹市花火大会<14日、八木町大堰橋一帯（八木町）> 六斎念仏踊り<20・23日、西光寺（八木町）> 牧山の松明行事<24日、普門院（日吉町）> 上げ松（松上げ）<24日、鶴ヶ岡・盛郷・芦生地区（美山町）>
9月	玉岩地藏の秋彼岸法会<下旬、玉岩地藏堂（日吉町）>
10月	からす田楽<中旬、川上神社（美山町）> 摩気神社神幸祭<中旬、摩気神社（園部町）> 夫婦神事<21日、大送神社・幡日佐神社（八木町）> 田原のカッコスリ<中旬、多治神社（日吉町）> 日吉神社の馬馳け<第3日曜、日吉神社（日吉町）> ひよし水の杜フェスタ<下旬、スプリングスパーク（日吉町）>
11月	美山ふるさと祭<3日、宮島小学校（美山町）> 大野ダムもみじ祭り<中旬、大野ダム公園（美山町）>
12月	京都帝釈天 除夜の鐘<31日、京都帝釈天（八木町）>

⑨ 多様で活発なまちづくり活動

南丹市内では、多くの活発なまちづくり活動が展開されています。

地域に目を向けると、区（自治会）が、地域におけるさまざまな課題の解決に取り組み、住民の連帯感の向上に努めています。地域特性に応じて、消防団や子ども会、老人会などの組織もさまざまな地域活動を行っています。

美山町では、合併前から旧村単位の 5 地区で地域振興会が設立され、地域ニーズの的確な把握と地域活力の維持向上を図る上で大きな役割を果たしています。近年では、他地区でも複数区にまたがる地域団体等が設立され、コミュニティビジネスを含めたまちづくり活動を行うなど、地域自治の機運が高まりつつあります。

地域での活動のみならず、分野別の活動についても、南丹市内ではさまざまな団体が活躍しています。南丹市を中心に活動している NPO やボランティア団体などを総合的に支援する拠点として、南丹市まちづくりデザインセンターが設置され、2017（平成 29）年 4 月 1 日現在、68 団体が登録されています。NPO 法人については、人口 1 万人当たりの団体数が府内の他の地域よりも多いことが、南丹市のまちづくりの特徴にも繋がっています。

地域をサポートする人材としては、2012（平成 24）年度から集落支援員が活動しています。2017（平成 29）年度現在、6 名の支援員が、地域や集落の実情を把握し、時代に対応した集落の維持・活性化を図るため、知見やノウハウを生かして市内で活躍しています。

2015（平成 27）年度からは、定住促進サポートセンターを拠点に、地域おこし協力隊が活動しています。協力隊は、地域に入ってそれぞれ特色のある地域を盛り上げるとともに、地域情報を全国に発信し、活力のある人材を南丹市へ呼び込む活動を行っています。2017（平成 29）年 4 月 1 日現在、8 名の隊員が活動しています。

その他、過疎地域に居住し、地域の維持・発展をサポートするため、府から里の公共員が任命され活動しています。

地域振興会活動
写真

南丹市まちづくりデザインセンター
写真

(6) まちづくりへの市民の思い

① 市民意識調査結果

※平成 29 年度市民意識調査結果を掲載予定

② 市民ワークショップ結果

※市民ワークショップ（なんたんきゃらばん）結果を掲載予定

2. 南丹市を取り巻く社会潮流

近年の社会潮流の大きな変化に伴い、地方自治体を取り巻く環境も大きな転換期にあると言えます。南丹市のまちづくりの方向性を考える上で、こうした状況の変化を的確に把握していく必要があります。ここでは、南丹市に関係して特に重要と思われる以下の6点について、現状を整理します。

(1) 急速に進む人口減少・少子高齢社会への対応

日本の総人口は、2008（平成20）年の約1億2,809万人をピークに減少に転じ、本格的な「人口減少時代」に突入しました。国立社会保障・人口問題研究所の中位推計では、2029（平成41）年には総人口が1億2千万人を下回ると見込まれています。また、人口減少とともに人口構成も大きく変化しています。結婚に対する意識の変化に伴う晩婚化や未婚率の上昇等により、次代を担う子どもたちの出生が低迷している一方で、健康寿命の延伸等により、高齢者の割合は高くなっています。

人口減少や超高齢化は、労働力の減少や地域活力の低下、内需の縮小、社会保障費の増大、地域コミュニティ機能の低下など、さまざまな面での影響が懸念されており、その対策は、我が国における喫緊かつ最重要課題のひとつとなっています。

国は、東京圏への人口の過度の集中を是正し、それぞれの地域で住みよい環境を確保して、将来にわたって活力ある日本社会を維持していくため、2014（平成26）年に「まち・ひと・しごと創生本部」を内閣に設置し、地方創生に力を入れています。

南丹市では・・・

- ・ 高齢化率が33.5%であり、全国平均（26.6%）よりも高い状況です。
- ・ 2015年の人口千人当たりの出生数は5.71人であり、全国平均（8.01人）よりも少ない状況です。
- ・ 2016年の転入者・転出者はそれぞれ、1,197人、1,166人でした。
- ・ 2016年の出生数・死亡数はそれぞれ、213人、465人でした。
- ・ 施設入所支援施設が5施設あるほか、多くの障がい福祉サービス施設があります。
- ・ 特別養護老人ホームが各町に1施設ずつあり、多くの介護保険事業所があります。

(2) 環境・エネルギーへの関心の高まり

化石燃料の大量消費等により、二酸化炭素等の温室効果ガスの排出量は近年増加傾向にあります。地球温暖化への影響は年々顕在化しており、洪水や干ばつ等の異常気象が生じているなど、地球環境への負荷低減が全世界共通の課題として掲げられています。

2015(平成27)年12月には、国連気候変動枠組条約第21回締約国会議(COP21)において、地球温暖化対策の新たな国際的な枠組となる「パリ協定」が採択されました。協定では、先進国も途上国も、すべての国で温室効果ガスの削減に向けた行動をとることが合意され、全世界で化石燃料依存からの転換が進みつつあります。

また、PM2.5等による大気汚染が深刻化しつつあり、健康への影響も懸念されています。

加えて、東日本大震災における原発事故を契機に、エネルギーに対する関心が高まっており、省エネルギーの徹底的な推進と再生可能エネルギーの開発・普及が重要視されています。

南丹市では・・・

- ・2015年度に、「バイオマス産業都市構想」の認定を受け、バイオマスの利活用を進めています。
- ・2015年度に、KES・環境マネジメントシステムの登録をうけ、環境負荷低減活動について市役所庁舎を挙げて進めています。
- ・2015年度に、環境省の「低炭素・循環・自然共生に資する取組を通じて地域創生を実現するモデル地域」として選定され、「南丹市モデル地域創生プラン」を策定しました。

(3) 地域経済を取り巻く環境の変化

我が国の経済情勢は、2008（平成 20）年に発生したリーマンショック後の景気後退や東日本大震災等の影響による厳しい状況から、国の経済対策の効果等により、緩やかな回復傾向にあります。しかし、地方への経済波及は遅れており、日本全体で効果が現れるにはまだ時間が必要な状況です。

さらに、経済のグローバル化が進み、経済活動の機会が拡大すると同時に、新興国の台頭による国際競争が激化し、生産拠点の海外移転による国内産業の空洞化など、我が国を取り巻く経済環境は依然として厳しい状況となっています。

一方、訪日外国人旅行者（インバウンド）数は、近年急速に増加しており、2014（平成 26）年には 1,341 万人（対前年比 29.4%増）を数えるまでになっています。国では、東京オリンピックが開かれる 2020（平成 32）年に向け 2,000 万人まで増やすことを目指す考えを示していますが、交流人口の拡大は、地域の活性化に繋がるものと期待されています。

雇用の面については、社会全般の雇用環境の激変や就業形態の多様化により、非正規雇用者が増加し、収入の格差などが生じています。また、団塊世代の退職により労働力人口が減少するなか、65 歳までの雇用の延長や有期労働者の無期雇用への義務づけや働き方改革を進めるとともに誰もが光り輝き活躍できる社会をつくることが求められています。

南丹市では・・・

- ・かやぶきの里、るり溪を中心に、観光客が増えており、2016 年度の観光入込客数は約 266 万人、観光消費額は約 29 億円でした。
- ・台湾を中心とした外国人旅行者が増えており、2016 年度の外国人宿泊者数は約 3,500 人でした。
- ・労働人口の減少により、市内事業者の労働力確保が難しくなっています。
- ・地元商店の高齢化、後継者不足により、商工会員数が減少しています。

(4) 安全・安心意識の高まり

2011（平成 23）年 3 月 11 日に発生した東日本大震災は、我が国観測史上最大のマグニチュード 9.0 という巨大地震と、それに伴って発生した津波や原子力発電施設の事故によって、広域にわたって大規模な被害が発生するという未曾有の複合災害となりました。さらに、2016（平成 28）年 4 月 14 日に発生した熊本地震では、震度 7 の揺れが連続して発生し、甚大な被害をもたらしました。また、近年、ゲリラ豪雨等の局地的な集中豪雨の発生により、各地に大きな被害をもたらしています。こうした大規模地震や集中豪雨による土砂災害、河川の氾濫等の発生を契機に、人々の防災に対する意識は急速に高まっています。

一方、高齢者や子どもが被害者となる凶悪犯罪や振り込め詐欺、インターネット犯罪、食品偽装や薬物混入等の「食」の安全をゆるがす事件等も発生しており、身近な地域における犯罪への不安が増大しています。

さらに、新たな感染症等の流行をはじめ、武力攻撃やテロ等の国民保護事案の発生が懸念されるなど、日常生活のさまざまな場面で、安全・安心の確保が強く求められています。

南丹市では・・・

- ・ 2013 年の台風 18 号、2014 年の集中豪雨により、河川が氾濫し、甚大な被害を受けました。
- ・ 2017 年の大雪では、積雪により集落が孤立するなど、園部・日吉地域を中心に大きな被害をもたらしました。
- ・ 高浜発電所、大飯発電所の UPZ（緊急時防護措置準備区域）に美山地域の約 80～90%が含まれています。
- ・ 消防団員の確保が困難となってきており、合併当初の 1,640 名と比較して、2017 年度は 1,440 名と減少しています。
- ・ 災害により開催を見送った年がありましたが、2007 年から 2 年ごとに「南丹市総合防災訓練」を開催しています。

（５）教育環境の変化

社会環境の変化や価値観、ライフスタイルの多様化等に伴い、教育に対するニーズも多様化、複雑化しています。次代を担う子どもたちを健やかに育むためには、学校・家庭・地域がそれぞれの役割と責任を自覚しつつ、地域社会全体で教育機能を発揮し合うことが重要です。

2015（平成 27）年の中央教育審議会の答申では、学校・家庭・地域が連携・協働し、地域全体で次代を担う子どもたちの成長を支え、地域を創生する「地域学校協働活動」を推進すること、そのためには従来のコミュニティ・スクール（学校運営協議会）とともに「地域学校協働本部」を全国に整備することが提言されています。

また、次期学習指導要領では、学校において単に知識の習得を図るだけでなく、「主体的・対話的で深い学び」を追求するため、いわゆる「アクティブ・ラーニング」の視点から授業内容を改善し、子どもたちがこれからの時代に求められる資質・能力を身につけ、生涯にわたって能動的に学び続けることが目指されています。

大学については、地域再生の核としてのあり方が見直されており、「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」が全国で進められています。

南丹市では・・・

- ・ 佛教大学、京都府立大学、明治国際医療大学、二本松学院の 4 つの大学等と連携協力に係る包括協定を締結し、幅広い分野で連携協力していくこととしています。
- ・ 少子化に伴い、小学校の再編を行い、小学校数は 17 校から 7 校となりました。

（６）地方分権の進展と協働意識の高まり

国から地方へ権限や財源を移譲する地方分権改革が進められ、地方自治体は住民に最も身近な行政主体として、これまで以上に自主性と自立性を高めていくことが求められています。

一方、地方の財政状況は、生産年齢人口の減少に伴う税収入等の減少や高齢化の進行による社会保障費の増大など、厳しさを増すことが予想されます。また、高度経済成長期以降に整備された道路や橋りょうをはじめ、上下水道、その他の公共施設等の多くは老朽化が進んでおり、今後、改修や更新等が増加していく時期を迎えることから、段階的な都市機能や社会基盤の集約化、公共施設等の更新問題への対応が必要となっています。

こうした厳しい財政状況の中で、地方分権改革の時代に即した持続可能なまちを創造していくためには、これまで以上の行財政改革の推進とともに、協働のまちづくりを進めていくことが重要です。まず、個人でできることは自らで行い、個人ではできないことは家庭や隣近所、地域で行い、それでもできないことは行政が行うという「自助・共助・公助」による「補完性の原則」の概念が再認識されています。また近年では、概ね小学校区域を単位として、分野を横断して地域課題を自ら考え解決する、小規模多機能自治組織を設立する動きも見られています。

一方、2015（平成 27）年には公職選挙法が戦後 70 年ぶりに改正され、選挙権年齢が満 18 歳以上に引き下げられました。若い世代がさらに、自分が暮らす地域のあり方や未来に関心を持ち、まちづくりへの参画に繋がるものと期待されています。

南丹市では・・・

- ・ 合併による交付税の特例措置が終わり、交付税の縮減が懸念されます。
- ・ 将来的な財政負担の低減および道路交通の安全性の確保を図るため、2014 年に橋梁の長寿命化修繕計画を策定しました。
- ・ 2010 年に「市民参加と協働の推進に関する条例」を制定し、市民参加と協働の推進を図り、市民が主役の活力あるまちづくりを進めています。
- ・ 2017 年に下水道事業などの経営を将来にわたり安定的に維持し、必要な住民サービスを提供するため、中長期的な視野に立った経営の基本計画である「南丹市下水道事業経営戦略」を策定しました。

3. 南丹市の基本課題

地域特性や社会潮流を踏まえ、南丹市の特色を生かしながら新たなまちづくりを進めるために、特に重要なものとして以下のような課題が挙げられます。

(1) 移住・定住について

全国的な傾向と同様に、南丹市においても総人口は減少傾向が続いており、まちの活力を維持していくためには、特に生産年齢層の転入を増やしていくことが重要です。

大都市圏近郊に位置し、広域道路網や鉄道の整備・充実による交通アクセスの良さという地理的利点の中で、良好な自然環境において比較的安価で家を構えることができるといった、南丹市で住まうことで得られる価値のイメージを、広く発信することが求められます。

また、2015（平成27）年度に策定した「南丹市地域創生戦略」に基づき、総合的・計画的に移住・定住促進を図っていますが、今後も雇用の創出や起業支援、住宅政策、子育て環境の充実など、多様なライフスタイルに応じて重層的に組み合わせた取り組みを図り、選ばれるまちづくりを進めることが求められます。

(2) 子育て・保健・医療・福祉について

南丹市は、子育てに関する助成制度や各種保育サービスも充実するなど、全市を挙げて子育て支援に取り組んでいます。少子高齢化や核家族化、ライフスタイルの多様化など、子どもや子育てを取り巻く環境は大きく変化しており、今後も子育て世代のニーズを充分把握した上で、安心して子どもを産み育てられる環境づくりが求められます。

一方、市民生活に必要な保健・医療・福祉サービスについては、京都中部総合医療センターや明治国際医療大学附属病院などの高度医療機能を備えた病院もあるほか、高齢者・障がい者関連の施設やサービスも比較的充実しています。サービスを充実させる一方で、介護保険料は府下でも最も高いなど、経済的負担がさらに増大することも予想されます。今後は全市を挙げて健康づくりの取り組みと意識の啓発を図ることが重要です。

市域が広大な南丹市で、地域に根ざしたきめ細かなサービスを行き届けていくためには、今後ますます、地域団体等と連携した保健・医療・福祉体制の充実が求められます。

(3) 環境・景観について

南丹市は大半を丹波山地が占め、るり溪や芦生原生林をはじめとする水源かん養機能などの重要な役割を果たす山林があります。また、北部を由良川が、中・南部を桂川が流れ、その間にいくつかの山間盆地が形成されるなど、豊かな自然に恵まれています。

また、合併後も美山町の景観行政団体を引き継ぎ、「南丹市美しいまちづくり条例」を施行して、早くから良好な景観の保全と形成に力を入れてきました。

今後も、豊かで魅力的な南丹市の自然や景観を未来に継承することが求められるとともに、環境保全型農業や森林資源のバイオマスへの利活用、体験交流型ツーリズムへの展開など、資源循環を通じた地域の活性化や観光振興とも絡めながら進めていくことが必要です。

(4) 観光・産業振興について

合併前から各4町は、観光振興やものづくり、農林業など、それぞれ個性的なまちづくりを進めてきました。観光スポットなどの地域資源も豊富で、日吉ダム周辺施設や美山のかやぶき民家群、るり溪高原と温泉施設などについては、南丹市の「交流人口」を増加させる大きな役割を担っています。今後も各4町それぞれの特徴を生かし、魅力を引きあげながらまちづくりを進めることが求められます。

その一方で、各4町の個性が強いがゆえに、「南丹市」という名前が対外的に浸透していない状況が、課題のひとつとして挙げられます。京都ブランドや丹波ブランドも活用しつつ、各4町それぞれの個性を効果的に結びつけ、「南丹市」としてのブランドを確立し、「南丹市」としての認知度の向上を図ることが重要です。

(5) 安全・安心について

南丹市は、大小の河川や多くの山間地を持つ地形から、水不足や洪水・土砂崩れ等が起こりやすく、2013（平成25）年の台風18号、2014年（平成26）の集中豪雨では河川が氾濫し、甚大な被害を受けました。また、福井県嶺南地域にある高浜原子力発電所や大飯原子力発電所の半径30km圏（緊急時防護措置準備区域UPZ）に南丹市の一部が含まれるなど、自然災害だけでなく、原子力災害、有事対応などを含むさまざまな危機に対応できる取り組みが求められます。

災害に強いまちづくりを実現するためには、行政による防災・減災体制の強化はもちろん、市民一人ひとりや地域コミュニティによる「自助」「共助」に基づく総合的な取り組みが必要です。そのため、「自助」や「共助」の考え方を広めるとともに、「共助」の基盤となるコミュニティづくりへの支援に取り組むことが重要です。

(6) 教育について

「まちづくりは人づくりから」という言葉があるように、南丹市が将来的に継続して発展していくためには、それを担う豊かな創造力と郷土愛を持った人材の育成が不可欠です。

子ども一人ひとりに、生涯にわたって学び続けることができる基礎学力の習得と、たくましく生きる力の育成を図ることが求められます。また、市内に数多く存在する特色ある地域資源を活用し、「ふるさと南丹市」の個性と魅力を学び伝えるとともに、学校・家庭・地域が一体となって、地域ぐるみで子どもを育てる教育環境づくりが重要です。

一方、南丹市には、京都府立の高等学校や特別支援学校に加えて、明治国際医療大学、京都医療科学大学、京都美術工芸大学、京都伝統工芸大学校、京都建築大学校、公立南丹看護専門学校、佛教大学園部キャンパスといった多くの高等教育機関が立地しています。

ものづくり・建築・芸術・福祉・医療など、さまざまな専門分野を有するこれらの教育機関と地元企業や地域団体、行政等が連携・交流を図り、産官学公連携による地域振興に繋げていくことが求められます。

(7) 行財政運営・協働のまちづくりについて

南丹市の財政は、財政健全化判断比率の指標である実質公債費比率や将来負担比率は減少傾向にあるものの、依然として非常に厳しい状況にあります。

今後、生産年齢（15～64歳）人口の減少による税収入の減少や地方交付税の縮減、高齢者の増加による社会保障費の増加、公共施設等の老朽化に伴う維持更新費等により、さらに厳しい財政状況を迎えることが予想されます。限られた財源の中で、市民が本当に必要とする施策・事業に選択・集中させるなど、持続可能な行財政運営が求められます。

行政改革を継続的に推進するとともに、機能の集約や広域連携を視野に入れた行政体制の構築が今後さらに必要となります。

また、持続可能なまちづくりに向けては、市民や地域との協働のまちづくりが不可欠となっていますが、人口減少や価値観の多様化等により、基盤となる地域コミュニティの機能低下が懸念されています。防災や地域福祉、地域自治などの分野では、今後ますます地域コミュニティの役割が増大していくため、いかに地域コミュニティ機能の維持・充実を図るかが重要となっています。美山町や日吉町の一部で活動する地域振興会制度を南丹市全域に広げていくことや、一部の自治体で導入されている小規模多機能自治制度の採用など、多様な方法で地域コミュニティのあり方を検討していくことが求められます。

第2章 未来の南丹市のすがた

1. まちづくりの基本理念

<補足> 基本理念や将来像は、今後の市民ワークショップの結果も踏まえて検討する予定です。

「基本理念」とは、まちづくりを進めるにあたって一番大切にしたい基本的な考え方です。市民・事業者・行政がそれぞれまちづくりを進めていくにあたっては、基本理念を踏まえた取り組みが求められます。

【参考】

※第1次計画では、「まちづくり」は自分たちの知恵と力を持って、自分たち自身で進める時代がはじまっており、まちづくりの担い手であるという自覚を持ってお互いに支援し協力しあうしくみをつくっていくとたわわている。そのため、“まちづくりのテーマ”が設定されている。

第1次南丹市総合振興計画で設定されたまちづくりのテーマ

みんなの笑顔 元気を合わせ 誇りときずなで未来を創る

2. めざすべきまちの将来像

まちの将来像は、市民・事業者・行政がそれぞれまちづくりを進めていくうえで、共通にイメージできるまちのあるべき姿を示したものです。10年後の南丹市のイメージを共有することで、それぞれの強みを生かした協働のまちづくりを図ることが可能になります。

【参考】

第1次計画の将来像

森・里・街がきらめく ふるさと 南丹市

※将来像は、市ホームページの検索結果名や市勢要覧のタイトルに使用

3. 人口フレーム

総合振興計画において、都市のインフラ整備や雇用の場の創出、教育・福祉の充実などによる将来の「定住人口」が、10年後のまちの活気を示す基本的な指標となります。

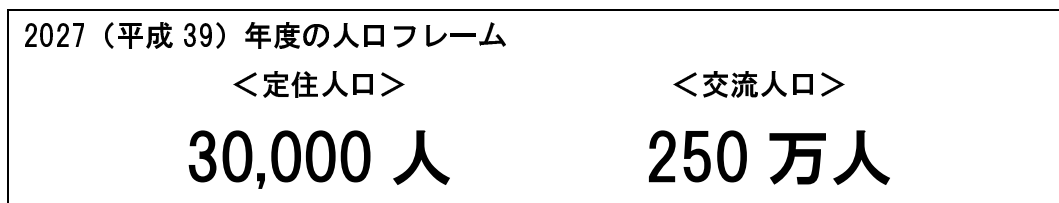
南丹市では、2014（平成26）年に策定した「南丹市地域創生戦略」の基礎資料として、「南丹市人口ビジョン」を作成し、長期ビジョンに基づいた目標人口を掲げています。

本計画においても、「南丹市人口ビジョン」を踏襲し、目標年度である2027（平成39）年の定住人口の目標を30,000人とします。

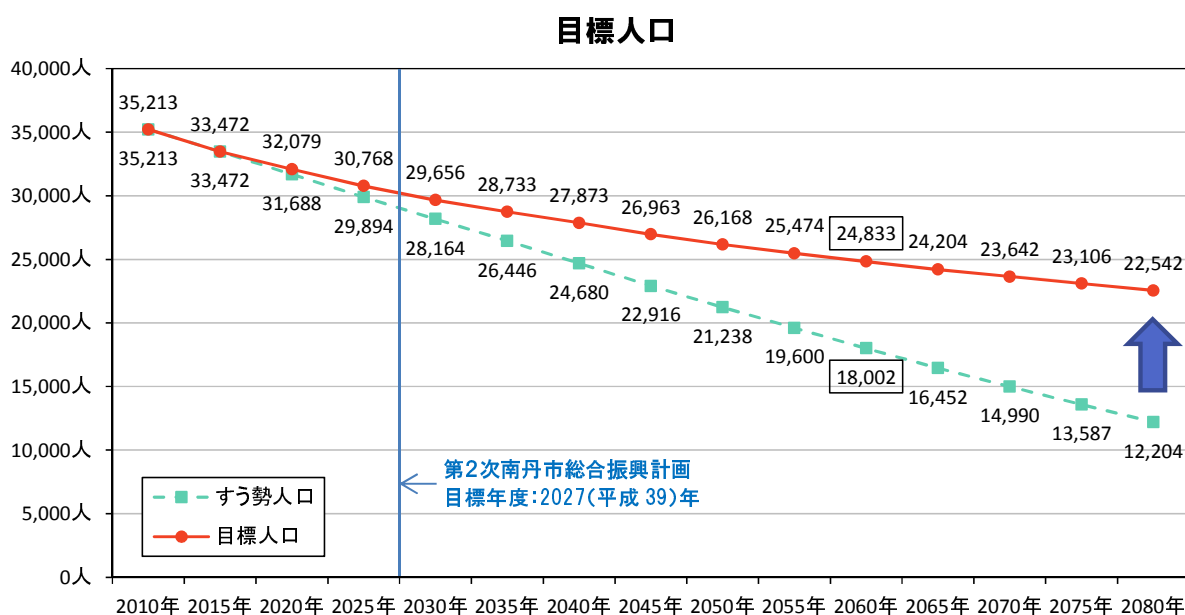
また、第1次計画では、定住人口とともに交流人口も目標数を設定しました。

南丹市には、スプリングスひよしや府民の森ひよしなどの日吉ダム周辺施設、日本の原風景が残るかやぶき民家群、るり溪高原、清源寺の十六羅漢像など、多くの観光客を呼び込む観光資源が数多く存在し、まちの活力の維持・充実に重要な役割を果たしています。

そこで、本計画でも引き続き交流人口の目標数を掲げ、2027（平成39）年度の目標を250万人と設定し、観光入込客数で把握することとします。



■南丹市人口ビジョンでのすう勢人口と目標人口



資料：南丹市人口ビジョン

4. 土地利用基本構想

恵まれた交通立地のもとに、各地域の産業、自然、歴史、文化資源やこれまでのまちづくりの蓄積を十分に活かした地域整備、市街地整備を図ります。

そのために自然環境に配慮した適切な土地利用の誘導を図る「ゾーン」、地域活動の基盤となる「拠点」、さらにまちの骨格となる「交流軸」を位置づけます。

(1) ゾーン形成

① ふれあいの森・国定公園ゾーン

農村景観や芦生原生林等の豊かな自然環境が豊富に存在し、また日本の原風景ともいえる重要伝統的建造物のかやぶき民家群が存在しています。

今後は、これら地域資源を保全し活かしながら都市農村交流を中心とした地域おこしを推進し、グリーン・ツーリズムや都市からの移住促進を図るほか、住民が主体となった農産物加工販売などを進め、自然とのふれあい豊かな地域整備を進めます。

② やすらぎの田園ゾーン

丹波高原の東部の丘陵地帯にあり、なだらかな山々に囲まれた緑豊かな地域で、明治国際医療大学や同附属病院、交流施設としての多くの人が訪れる日吉ダム周辺レクリエーション施設があります。また、平野部に広がる田園地帯には、農村環境公園やバイオエコロジーセンターなどの施設があり、今後はこのような地域特性を活かした農・畜産ブランド化の推進などの産業振興、スポーツ・健康づくりイベントの推進、学習セミナー活動や文化芸術活動の場づくり、余暇施設の充実などの地域整備を進めます。

③ にぎわいの市街地ゾーン

この地域は古くから広域交通の要衝として、また地域の政治・経済・文化の中心地として発展してきました。近年は JR 山陰本線複線電化や京都縦貫自動車道の整備により、都市圏との時間的距離がよりいっそう短縮され、企業・事業所の進出や高等教育機関の進出がみられ、地域医療の拠点施設として京都中部総合医療センターがあります。

今後は、企業誘致の推進、地元商業の活性化とともに JR 駅前開発および再開発事業の推進、住宅地整備、上下水道整備などの市街地整備を進めます。

④ 癒しの里山ゾーン

この地域は、なだらかな里山に囲まれた緑豊かな田園地域と、大阪府、兵庫県方面からの玄関口にあたり古くから多くの人々に親しまれている景勝地るり溪高原があり、近年は温泉施設等の整備によって阪神方面からの来訪者が増加しています。

今後は、四季を通じて楽しめる自然と温泉を生かした、観光とレクリエーションを中心とした地域整備を進めます。

(2) 拠点形成

広域交流軸沿線にあつて、商業や医療、行政サービス施設が集積する園部の市街地を中心とする地域を都市拠点と位置づけ、南丹市の中心としての市街地整備による、多様なサービスの集積を図ります。

また、八木、日吉、美山地域の暮らしの中心となる地域を、都市拠点と連携しながら行政サービスと住民活動を支援する機能の集積を図る地域拠点として位置づけます。

(3) 交流軸形成

① 広域交流軸

京都縦貫自動車道、国道9号、162号、372号、477号の広域幹線とJR山陰本線を「広域交流軸」と位置づけ、活発な交流と物流を促すための整備を促進します。

② 地域交流軸

地域間を連絡し、主軸幹線と鉄道・高速道路などを連絡する市内の主要な府道、市道および広域農道を「地域交流軸」と位置づけ、安全で安心できる道づくりを進め、地域住民の交流を促進します。

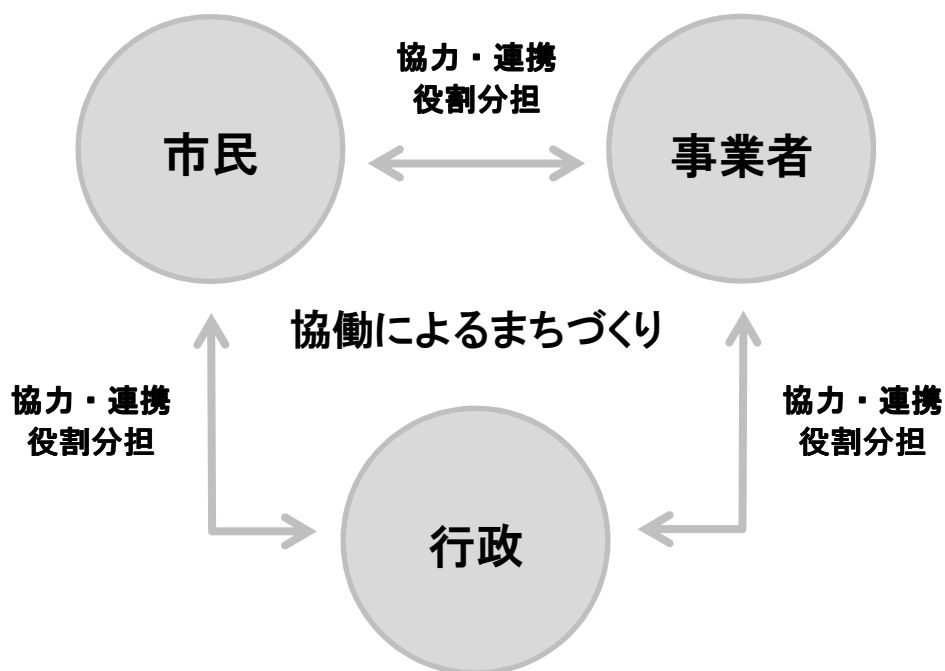
5. まちづくりの進め方

めざすべきまちの将来像の実現に向けた取り組みは、行政だけが進めるものではありません。「自助・共助・公助」による「補完性の原則」に基づき、南丹市に関わるすべての人がまちづくりに参画することが求められます。

このことから、市民・事業者・行政はそれぞれ次のような役割分担のもと、十分な協力・連携を図りつつ、一人ひとりができることから行動を起こし、協働によるまちづくりを進めていく必要があります。

■まちづくりにおける市民・事業者・行政の役割

市民	地域コミュニティの一員として、まちづくりへの理解を深め、地域課題の解決や地域の魅力づくりに向けて、まちづくりに積極的に参画することが求められます。
事業者	地域社会を構成する主体として、まちづくりへの理解を深め、事業活動を通じてまちづくりの活性化に貢献することが求められます。また、まちづくりの事業主体として、地域に与える影響に配慮しつつ、魅力的なまちづくりに貢献していくことが求められます。
行政	市民や事業者がまちづくりに参画するための支援や機会を充実し、必要な情報の提供・共有化に取り組むことが求められます。また、地域ごとの実情や市民の声を把握し、きめ細やかで的確なサービスを、効率的かつ効果的に提供することが求められます。



6. まちづくりの方針

＜補足＞今後の計画策定の過程の中で、変更になる可能性があります。

（１）誰もが健やかで幸せに暮らせるまちづくり【保健・医療・福祉】

誰もが健やかで安心して暮らすことができるよう、市民一人ひとりの健康づくりと疾病予防に取り組むとともに、関係機関との協力のもと、病院や診療所との連携をさらに強化し、地域医療の充実を図ります。

福祉分野においては、「自助・共助・公助」の「補完性の原則」に基づいた地域ぐるみの福祉のまちづくりを推進するとともに、子育て支援や高齢社会への対応など、誰もが住みやすい福祉環境の充実を図ります。

（２）美しく快適なまちづくり【都市基盤】

道路網や河川、公共施設など、活力のあるまちを支える都市基盤の適切な整備と維持管理を行うとともに、魅力ある都市空間を形成するため、市街地の整備・活性化を図るとともに、秩序ある土地利用を推進します。

また、今後の高齢社会の一層の進行を見据え、交通弱者対策としての公共交通機関の利便性向上を図るなど、いつまでも快適に暮らせる生活環境の充実を図ります。

（３）自然と共生したまちづくり【環境】

るり溪や芦生原生林、美山川清流など、南丹市に残る豊かな自然を次世代に引き継ぐとともに、いつでもふれあうことができるよう、市民・事業者・行政がそれぞれの役割分担に応じた環境保全活動に取り組み、人と自然が共生できるまちづくりを進めます。

また、地球にやさしいエネルギー対策や環境学習を進めるとともに、持続可能な循環型社会をめざすため、ごみの減量化、再利用化・再資源化する環境3Rを推進します。

（４）安全・安心なまちづくり【危機管理】

東日本大震災や台風18号を教訓として、誰もが地震や台風などの自然災害から守られ、安全で安心して生活することができるよう、建物の耐震化などの減災対策を進めるとともに、地域と一体となった防災体制の強化を図ります。

また、防犯や交通安全、消防などの生活安全については、身近に存在する危険に対する意識啓発や関係機関との連携強化に努めます。

市民一人ひとりの生命や財産を守る安全・安心なまちを目指します。

（５）活力とにぎわいのあるまちづくり【産業振興】

南丹市の豊かな自然資源や歴史・文化資源などの有効活用を図り、従来からのまちの魅力を上昇させ、市内外に積極的に発信するとともに、各４町の観光資源のネットワーク化やイベントなどの充実により、新たな魅力づくりに取り組みます。

また、農業・林業の振興や既存企業の活性化、優良企業の誘致、地場産業の育成など、各分野における産業の充実に向けた取り組みを推進します。

さらに、起業支援等を含め、市内で働ける多様な就労の場の拡大を図ります。

（６）学び楽しむまちづくり【教育・文化・スポーツ】

幼児・児童生徒一人ひとりに、生涯にわたって学び続けることができる基礎・基本の習得を図りながら、「ふるさと南丹市」を愛する心を育み、未来に向かってたくましく生きる力を育成します。

また、市民一人ひとりが、生き生きと学び続けることができる生涯学習社会の構築をめざし、互いにつながり合い豊かに生きるために必要な学習機会の充実や文化・スポーツ活動の振興を図ります。

（７）互いに尊重し、協力しあうまちづくり【協働・コミュニティ・人権】

人権を大切にすまをまちづくりを基本に、活力ある地域社会の実現に向けて、地域での様々な交流活動をさらに推進することで、地域コミュニティ活動の活性化を図ります。

また、市民や地域、事業者、行政がそれぞれの役割分担を認識し、南丹市に関わるすべての人々が一丸となった協働のまちづくりを図ります。

（８）持続可能なまちづくり【行財政運営】

今後さらに厳しさが予想される財政状況の中で、安定した行政サービスを継続して提供するため、事業の成果を重視し、経営感覚を備えた効率的・効果的な行財政運営を推進します。

また、市民に親しみと信頼が持たれる行政サービスの提供のため、職員一人ひとりの意識の向上を図り、多様化する市民ニーズに的確に対応できるよう組織横断的な連携や機動性に富んだ組織体制の構築を進めます。

第3章 未来を実現するための取り組み

<補足> 今後の計画策定の過程の中で、変更になる可能性があります。

分野別方針	基本施策
1. 誰もが健やかで幸せに暮らせるまちづくり 【保健・医療・福祉】	健康づくりの推進
	地域福祉の推進
	子育て支援の充実
	高齢者福祉の充実
	障がい者福祉の充実
	地域医療体制の充実
	社会保障の充実
2. 美しく快適なまちづくり 【都市基盤】	市街地の充実
	景観の保全・形成
	公園・緑地の整備
	住宅・住環境の充実
	上水道の充実
	下水道の充実
	河川環境の整備
	道路網の確立
公共交通の充実	
3. 自然と共生したまちづくり 【環境】	自然環境の保全
	生活環境の向上
	地球環境の保全
	資源循環型社会の形成
4. 安全・安心なまちづくり 【危機管理】	災害対策の充実
	防犯活動の強化
	交通安全対策の強化
	消防・救急体制の充実
5. 活力とにぎわいのあるまちづくり 【産業振興】	観光の振興
	農業・林業の振興
	工業の振興
	商業の振興
	雇用の安定

分野別方針	基本施策
6. 学び楽しむまちづくり 【教育・文化・スポーツ】	家庭や地域の教育力の向上
	学校教育の充実
	生涯学習の推進
	文化・芸術の振興
	伝統文化の継承
	スポーツ環境の充実
	青少年の健全育成
7. 互いに尊重し、協力しあうまちづくり 【協働・コミュニティ・人権】	協働のまちづくりの推進
	コミュニティ活動の活性化
	人権の尊重
	男女共同参画社会の推進
8. 自立したまちづくり 【行財政運営】	持続可能な財政運営の推進
	効率的・効果的な行政運営の推進
	行政サービスの向上